

## 震災と多文化共生

### 東北朝鮮学校の経験から考える

早稲田大学 加藤 恵美

#### 1. 研究の背景

東北朝鮮学校（東北朝鮮初中級学校）は、宮城県仙台市八木山に1965年に建てられた朝鮮学校である。この東北朝鮮学校は、設立50周年を目前に2011年3月11日の東日本大震災で被災し、校舎を使用できなくなった。その大震災直後の2011年3月31日に、宮城県は東北朝鮮学校に対する補助金の打ち切りを発表し、仙台市も2013年2月に続いた。その一方で、文部科学省も、東北朝鮮学校に対する激甚災害制度の適用を見送った。このような事情を背景に、東北朝鮮学校は校舎の再建をあきらめ、被害が比較的軽微だった寄宿舎を独自の費用で本格的に改修し、2015年に「校舎」として用い始めた。

それとは対照的に、阪神・淡路大震災で被災した朝鮮学校の校舎の再建は、比較的短期間で進んだ。例えば東神戸朝鮮初中級学校（現、神戸朝鮮初中級学校）は、被災2年後の1997年3月に新校舎竣工式を行うに至った<sup>1</sup>。その背景には、神戸の朝鮮学校が、東北朝鮮学校が得られなかった日本政府と地方自治体からの経済的支援を得られたことがあった。つまり日本政府は、激甚災害制度を適用し、校舎の再建費用を私立学校なみにカバーした。さらに兵庫県と神戸市は、被災翌年に例年より多くの補助金を朝鮮学校に支給した。

#### 2. 目的と方法

神戸の朝鮮学校と仙台の朝鮮学校が被災後に日本政府と地方自治体から受けた支援がこれほどに異なったのはなぜか。本報告はこのような問題意識をもって、次のように「歴史で考える」<sup>2</sup>ことを目指す。すなわち、まず戦後の3つの関係史、①在日コリアン、民族団体、朝鮮学校の関係史、②日本政府と朝鮮学校の関係史、③地方自治体（宮城・仙台と兵庫・神戸）と朝鮮学校の関係史の観点から、震災のおこった1995年と2011年がいかなる時期であったのかを検討する。また、本報告は校舎の再建をあきらめた東北朝鮮学校の「再建」を、新しい歴史の始まりとして、地域社会における関係性の再構築という観点から検討する。本報告はこうした議論を通じて、多文化共生にとって震災がいかなる「機会」であるのかについての考察を深めてゆく。

#### 3. 結論

神戸の朝鮮学校の強みは、地域社会における「厚い」関係にある。それは兵庫県と神戸市が、日本政府の朝鮮学校に対する厳しい態度と、それに同調する多くの地方自治体の傾向に抗して、現在に至るまで朝鮮学校への補助金を拠出し続けている事実にも表れている。これに対して東北朝鮮学校も、震災前まで弱かった地域の公立学校との「横」の関係、そして地方自治体との「縦」の関係の強化に取り組み始めている。

在日コリアン・コミュニティの高齢化を背景に、朝鮮学校は生徒の確保に苦慮し、とりわけ地方の朝鮮学校は苦しい状況にある。その中で東北朝鮮学校は、被災をきっかけとして、地域社会にとって価値ある学校として、すなわち「地域の一員としての歩み」<sup>3</sup>を始めている。それは、仙台あるいはより広く東北の在日コリアン・コミュニティに選ばれる朝鮮学校になるための努力でもある。

※この報告は、科学研究費補助金（若手研究（B）、課題番号：15K21445、代表者：加藤恵美）の助成を受けて行った研究の成果として行う。

<sup>1</sup> 仲野誠「朝鮮初中級学校『復興』をめぐる」岩崎信彦他編著『阪神・淡路大震災の社会学第3巻』昭和堂、1999年。

<sup>2</sup> キャロル・グラック（梅崎透訳）『歴史で考える』岩波書店、2007年。

<sup>3</sup> 玄唯哲「地域の一員としての朝鮮学校」（聞き手：郭基煥）東日本大震災在日コリアン被災体験聞き書き調査プロジェクト編『異郷被災—東北で暮らすコリアンにとっての3.11 東日本大震災在日コリアン被災体験聞き書き調査から』荒蝦夷、2015年。